特集

イヌワシ飼育40年の歴史

園長 小松 守　　飼育展示担当 佐々木 祐紀

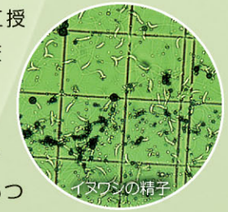
希少な猛禽イヌワシの飼育が秋田で始まったのは1970年。秋田と山形の県境に位置する鳥海山で生まれたヒナ2羽、オス「鳥海」とメス「白滝」を保護してからでした。当時はまだ大森山動物園(1973年開園)ができておらず、千秋公園児童動物園時代のことでした。「白滝」は死んでしまいましたが、「鳥海」は今も元気で現在39才となり、国内飼育の最高齢と思われます。秋田のイヌワシ飼育歴は、「鳥海」の年齢と重なり、長いものになりました。その後、大森山動物園では繁殖にも成功し、現在の飼育数は10羽にまで増えました。また、各地の動物園に増えたヒナを送るなど、展示にとどまらず、繁殖技術の確立や種保存(生息域外保全)にも努め、東京の多摩動物公園とともに、国内での繁殖基地的役割を果たしています。また、大森山動物園は、(社)日本動物園水族館協会・種保存委員会のイヌワシ繁殖計画をコーディネートする種別調整園にも指名されています。約40年のイヌワシ飼育を振り返りつつ、今後を展望してみたいと思います。

はじまりの時代

イヌワシの飼育が始まったころは、飼育データもなく、生態がよくわかっていなかったばかりか、種保存という言葉さえ動物園関係者には一般的ではありませんでした。森の王者と呼ばれるイヌワシの飼育ケージも20 m²程度と、貧弱なものでした。しかし、1982年、「白滝」が産卵したことで、イヌワシの繁殖への思いが湧き上がりました。

繁殖への挑戦の時代

当時、飼育下でのイヌワシの産卵は珍いものでした。しかし、飼育舎が狭く、保護された2羽は人の手で育てられたためか、うまく交尾できませんでした。文献調査、地元のイヌワシ研究家などとの情報交換、秋田大学との共同研究で繁殖行動と鳴き声との関連性の調査なども行った後、人工授精への挑戦となりました。1988年からこの挑戦はスタートしたのですが、「白滝」の死亡(1989年)により中断が余儀なくされました。その後、新たなメス「たつ子」(1988年旧田沢湖町で保護)が導入され、人工授精も粘り強く続けられ、1998年ついに有精卵を取ることに成功、胚の発育も確認できました。ふ化こそできなかったものの、日本初の人工授精での繁殖に、大いに期待が高まりました。しかし一方では、人工授精はタイミングの見極めが難しいうえ、イヌワシへのストレス、術者への負担など大きなリスクも背負っていました。こうしたなか、交尾が期待できそうな新オスの導入が決まり、繁殖作戦は人工授精から自然交配へと舵が切られました。新潟産イヌワシを両親にもつ多摩動物公園生まれのオス「信濃」と、秋田の旧田沢湖町産のメス「たつ子」という、共にルーツを雪国に持つ新ペアが2000年につくられました。


イヌワシの精子

イヌワシの胚

新イヌワシ舎

こうした繁殖作戦のベースには、1989年の新イヌワシ舎の建設があったことも忘れてはなりません。少しでも広い空間で、気高いイヌワシが秋田らしい環境で暮らす様子を見てもらいとの思いもあり、秋田の森を象徴するブナの木が植えられた、高さ約10 m、広さ約100m²のケージがつくられました。

初めてのヒナ誕生

2003年、「信濃」と「たつ子」の間に、待望のヒナ1羽が誕生しました。しかし、初めての繁殖であり、親鳥がヒナを抱けるのか、餌をあげられるのかとの不安は大きく、無事成長することを祈りながら、些細な変化も見逃さないよう、慎重なモニター観察が続けられました。不安は杞憂に終わり、「たつ子」は初めてのヒナを見事に育てあげました。イヌワシの未来に明るい光をもたらした記念すべき大森山動物園最初のヒナに、市民は「空」と名付けました。

当園で初めて飼育した「白滝」と「鳥海」(旧イヌワシ舎にて)

ふ化して14日目の「空」

失敗から生み出された逆転の発想

「信濃」と「たつ子」のペアは、2005年にも2個産卵、うまく2個ともふ化しました。嬉しい反面、気がかりなことがありました。イヌワシは、繁殖習性のためか、巣内のヒナ同士に争いが起き、早くふ化したヒナが、後からふ化したヒナを攻撃し、突き殺すことが多いのです。餌不足が闘争を誘引するとの見方もあり、ヒナには十分な餌が与えられました。しかし、攻撃を避けることはできませんでした。攻撃を受け瀕死の重傷を負ったヒナは、保護され人の手で育てられることになりました。その後、すっかり元気を回復し成育したヒナは、兄ヒナのいる巣に戻されました。親鳥は、戻された弟ヒナに何度も餌を与えようとしましたが、弟ヒナは受け付けませんでした。兄ヒナも弟ヒナを攻撃することはなくなっていたのですが、結局弟ヒナは、兄も、親さえも怖がったためか、餌をとれずに死亡してしまいました。親との絆を紡ぐ大切な時期に人に育てられた弊害だったのでしょうか。痛ましい出来事でした。2006年、今度は3つの卵が産まれ、3つともふ化しました。前回の苦い経験をもとに、全てのヒナが親元で育つ方法を検討しました。攻撃され、弱ったヒナを巣から取り上げるのではなく、攻撃する強いヒナを取り上げ、その間に弱いヒナに十分に親子の絆を結んでもらおうという作戦をとりました。ふ化後約1ケ月でヒナ同士の闘争がなくなることも経験上わかっていたので、それまでの辛抱です。闘争しないように巣内に1羽だけを残し、残りの2羽は一時的に、人に慣れないようにしつつ、人が育てました。また、人の姿をヒナに見せないように、親鳥の頭部に似せた模型を使って餌を与え、巣内の音もリアルタイムで聞かせるなどの工夫も凝らしました。数日間を目安に、順番に巣内のヒナと入れ替えて行く、秋田独自の「ローテーション育雛方式」を実践しました。(詳細は右記参照)約1月後、巣では3羽のヒナが、お互い争うことなく親鳥から餌をもらう様子が観察できました。画期的な方法が確立したのです。

模型を使って給餌する様子

無事育ったヒナ

両親と子供たち3羽(このように5羽のイヌワシが並ぶのは大変貴重な光景です)

繁殖基地づくり拡大のために

2003年からの繁殖で、9羽のヒナが無事に成長しました。繁殖した個体は、繁殖基地の拡大を託され、盛岡や石川などの動物園に旅立っていきました。多くの人々にイヌワシという動物を見てもらうために、また、より多くの飼育データ蓄積のために、そして何よりもイヌワシ自身の命をつなぐという大事な仕事を担ってもらうために。イヌワシの繁殖基地が増え、各地でイヌワシが増えることで、イヌワシの生息域外での保全がより強固なものになるでしょう。将来的には、野生イヌワシ保護の手助けにも結びつくかもしれません。

イヌワシという動物との語らいを求めて

2008年、イヌワシのヒナを人の手で育てるという新たな挑戦が始められました。動物園のイヌワシは、網越しで、いつも遠くの止まり木にいるため、近くで見ることができません。「もっと間近で見てもらいたい」「大きさや力強さを実感してもらいたい」、そんな思いを実現するために、これまで未経験の分野への挑戦が始められました。ヒナを人の手で育て、人に馴らすのです。大森山では前例のない試みであり、担当者の辛抱強く、緻密な訓練、そして豊かなイヌワシ飼育経験が不可欠です。現在、イヌワシを腕に乗せ園内を周り、他の動物や環境に馴らすための訓練が続けられています。イヌワシが目の前で羽ばたく時、あの力強い風を感じたとき、大人も子供もイヌワシの生きる力を感じてくれることでしょう。大森山動物園は、こうした何かを伝えることにもこだわり続けたいと考えています。イヌワシも、大森山動物園も存在意義を失わないためにも。

飼育員の腕に乗るイヌワシ